

3. パネルディスカッション概要

国 際 協 力 は じ め の 一 歩

～ 伊 達 公 子 さ ん と 語 ろ う ～

と き 平成15年3月9日(日)
と ころ 栄ガスビル 5階ガスホール

【司 会】 「国際協力はじめの一步～伊達公子さんと語ろう」にご来場いただき、まことにありがとうございます。

初めに、携帯電話の電源はあらかじめお切りになるか、マナーモードのご使用をお願いいたします。また、写真撮影等で席を立つこと、並びにフラッシュのご使用はご遠慮いただきますようお願いいたします。

それでは、開会に先立ちまして、JICA中部国際センター所長の荻原久義から一言ごあいさつさせていただきます。

【荻原久義氏】 皆さん、こんにちは。

「伊達公子と語ろう」、日曜日なのにこんなに大勢の方にお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

国際協力事業団、通称JICAと呼ばれておりますけれども、JICAは「人づくり」「国づくり」、こちらに書いてございますけれども、「心のふれあい」というキャッチフレーズをもとに、現在、世界56カ所、日本国内18カ所を拠点に活動しております。名古屋に来たのは今から42年前、実は東京よりも早く国際研修センターというのをこの名古屋につくった歴史がございます。その42年の歴史の中で、皆さん方とともに、あるいは皆さん方のご支援をいただきながら活動しております。本日は、伊達公子さんがJICAのオフィシャルサポーターということに昨年なりまして、実は日本で最初のイベントということで、こちら名古屋に来ていただいております。

こうした背景には、こちらのグリーンのところの1番に書いてございますけれども、私どもの事業の一つとしてエッセイコンテストというのをやっております、中学生の部でこの愛知県が全国で一番応募数が多かったわけです。もちろん全国で一番というのは、東京や大阪と比べても断トツでこの愛知県の中学生がエッセイを一番数多く応募されたと。こういったことが背景にあったんだと、私はそう思っております。そして、そういった中学生の人たちが大勢エッセイコンテストに応募してくれたその原因は何なのかということを考えてみまして、いろいろ文章を読ませていただいたんですが、その背景には、恐らくこの会場にいらっしゃっている皆さん方、ご家庭のお父さんやお母さん、それから学校の先生方、皆さん方がちょっとした後押しを子供さんたちに対してしているんじゃないかと、そんなふうにエッセイからうかがっております。そういったちょっとした後押しということが、今、大変大切になっているんじゃないのかと、そんなふうに思います。

国際化を鏡に自分のあるべき姿を考える。国際化を鏡にと申しますのは、ちょっと違った世界、より貧しい困っている人たち、そういう人たちもなぜあんなに明るいのかというようなことを考えたり、あるいはアフガンの人たちを考えて、学校に行けない子供たちと自分が学校へ行けているといった違いを鏡に自分を考えると。そういったことが、これからこの地元で立派な社会人になっていく子供たちにとって大変大切なことになっているんじゃないのかと、そんなふうに感じております。

本日、皆さんがこの「伊達公子さんと語ろう」、この会場で何かそういった感じをお持ち

ち帰りになっていただいて、そしてまた学校、あるいはご家庭できょうの会合がまた振り返られて、家庭でご家族で話し合われる機会になることを私は望んでおります。そういった願いを込めながら、私のあいさつの言葉とさせていただきます。どうぞ楽しんでこの時間を過ごしていただきたいと思います。どうも失礼いたしました。

【司 会】 ありがとうございます。

お手元のプログラムにありますように、このイベントは2部構成となっております。第1部では、伊達さんがベトナムで実施されたキッズテニスの模様「テニスは国境を越えて」を見ていただきます。第2部では「だれにでもできる国際協力」をテーマに、伊達さん、有識者の方々のパネルディスカッションを行っていただきます。

なお、プログラムと一緒にアンケート用紙は、お帰りの際にご提出をお願いいたします。

それでは、ビデオを上映いたします。

「国際協力ははじめの一歩～伊達公子さんと語ろう」

コーディネーター 町永俊雄	N H K 名古屋放送局 エグゼクティブ・アナウンサー
パネリスト 伊達公子	プロテニスプレーヤー JICAオフィシャルサポーター
アーナンダ クマーラ	鈴鹿国際大学教授 名古屋 N G O センター 理事
齋藤弘之	安城市歴史博物館学芸員・ J O C V 愛知県 O B 会長
荻原久義	JICA 中部国際センター 所長

【司会】 それでは、これより第2部のパネルディスカッションに入ります。

パネリストの方の紹介は、配付の資料でかえさせていただきます。

お待たせいたしました。それでは、パネリスト及びコーディネーターが入場いたします。皆様、拍手でお迎えください。（拍手）

それでは、コーディネーターの町永俊雄さん、どうぞよろしくお願いたします。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 よろしくお願いたします。

きょうは、ようこそおいでくださいました。きょうは「伊達公子さんと語ろう」ということで、お話をいろいろとこれから伺おうと思います。ほとんど満員ですね。

きょうは国際協力ということですが、まさにタイトルにあるように、伊達公子さんと、実は私、ちょうど帰って1週間になるんですが、バングラディッシュにおよそ1週間、一緒に行ってまいりました。伊達公子さんがキッズテニスと同時に、海外協力のあり方、海外協力、JICAの活動などを視察したのに同行をしてきましたので、きょうはその話も中へ盛り込みながら、伊達さんの実際に経験したこと、体験したことなどを中心に話を進めていきたいと思ひます。

それでは早速、伊達さんのほかにもすばらしいゲストのパネリストの皆さんがおいでなので、伊達さんにまず、バングラディッシュでは一体どういった体験をしてきたのか、そしてクマーラさんには、ふだんどんな活動をしているのか。そして、齋藤さんにも今現在の活動をお話ししていただくと。荻原さんに、今こんなことを考えていますという、まず自己紹介も兼ねて、早速お話しを伺うことから始めたいと思ひます。

では伊達さん、バングラディッシュでの体験をお話しいただきましょうか。

【パネリスト（伊達公子氏）】 今、町永さんの方からお話があったように、ちょうど1週間前にバングラディッシュから戻ってきたんですけれども、バングラディッシュに初めて今回行ったことになるんですけれども、いろんな国からの援助を受けている国ということをももちろん知識として頭に入れてバングラディッシュの方に行ったんですけれども、実際にバングラディッシュの国自体は非常に皆さん明るくて、そして好奇心が旺盛で、町自体も活気にあふれている、そんな国でした。そして、人々というのは、日本人と比べますと、容姿からいきますと、町が排気ガスが非常に多いということもあると思うんですけれども、やはり洋服なんかも排気ガスの影響でか、ちょっと黒くなったような洋服を着ている人も非常に多かったんですけれども、もちろん靴を見ればはだしの人も多かったですけれども、車が非常に多かったのに私は非常に驚きました。ベトナムへ行ったときにしてもバイクが多かったりしていたので、そういう意味ではきれいな車も非常に多く走っていたので、それは驚きの一つでもあったんですが、何といたって人々が明るくて、好奇心旺盛で、こちらがカメラを向けてもどんどん興味を持って、来て、食い入るようにしてカメラを見たり、いろんなことに対して興味を示してくれたというのも驚きの一つでもあったんですが、実際にバングラディッシュの中では国際協力隊員の皆さんと会って活動を見たり、そして専門家の方たちの活動を見たり、私が訪れたのは市内にあります婦人科病院と言えればいいんですかね。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 健康保健センターとか言っていましたけれども。

【パネリスト（伊達公子氏）】 女性が訪れる病院ですね。小児科も入っていれば、出産をする分娩室があったり、手術をする部屋があったりということで、なかなかバングラディッシュでは女性が宗教の違いなどでまだまだ病院に行く、外にまず出るというのが、市内ダッカでは随分と女性も外に出てもいいというふうに変わってきたとはいえ、村の方に行くともまだまだ家にいることが多いというふう聞いていたんですが、あの病院の中には随分と女性が病院に足を運んで、出産も家で産むというよりは病院に行って産むということが、随分ここ何十年かけて変わってきたというふう話を聞いて、病院の建物自体は想像していた以上にすばらしいものでしたね。ただ、衛生面とかを見ると、日本を基準に考えてしまうと、衛生面とかは大丈夫なのかなというふうな心配をするところはあるんですけれども、未熟室のところを見たりもすると、本当に小さな体の子供たち、生まれて数日という子供たちが、今までであれば命を落としていた子供たちが、その病院ができて、日本の専門家の方たちの派遣によってたくさんの子供たちの命が救われて育っていているという現状を見ると、そういう専門家の方たちの力というのは大きいんだなというのを目で見て、話を聞いて感じたりもしました。

そして村の方に行けば、まだまだ井戸水を飲んでいるというのがごく当たり前のようになっているんですけれども、その井戸水というのが日本人のように普通に水道水が飲めるという状況ではなくて、その中に砒素が含まれていて、それを飲み続けると体に大きな影響があるということで、それをわかっているにもかかわらず飲み続けているという現状がまだまだ残っ

ているので、井戸のところに赤いマークがついているんですね。赤いマークがついていると飲めない、砒素が多く含まれていて。それがついていない水を飲むといいということなんですけれども、赤いものがついていても生活用水としてまだまだ飲んでいるというのは脱化しないと、村の方に行くと大きな違いがまだまだ残されているんだなというのを感じました。

ただ、その中でも子供たちが、私が村の方に行ったときには、子供たちが家の片隅という感じのところの、屋根がちょっとついているところで女の子が集まって授業を受けているんですけれども、そこで年ごろの女の子たちが、学校に通う子供たちも非常にまだまだ村の方に行けば少ないんですけれども、その中でも14歳ぐらいですかね、女の子は親から結婚する相手を決められて結婚するそうなんですけれども、子供たちが結婚を間近な控えながら性教育を受けているというのを目にして、やはり日本との大きな違いというのは、そういうところから感じさせられたところもありました。最終的に子供たちを見ていると、キッズテニスをして、村で見た子供たち、町で見た子供たちも目を生き生きとさせて、明るい、そして心が非常に豊かなんだなということを非常に強く感じた1週間でした。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 はい、ありがとうございました。

今の伊達さんの話にもありましたように、キッズテニスというイベントも当然やりに行くんですが、そのついでとってはなんですが、もう一つの大きな目的が視察でありました。女性であるということも含めて、リプロダクティブヘルスという女性の出産に関する健康のどんな活動が行われているかを見ていただいた。そういう中で女性の健康保健センターなども見ていただいたんですが、実はそこで出産に立ち会ったんですよ、たまたま行ったときに。

【パネリスト（伊達公子氏）】 そうなんです。偶然訪れた病院で、院長先生が案内をしてくれている途中に分娩室にどうですかと言われて、「分娩室ですか、私は分娩室に入ったことはないですね」と言っていたら、「どうぞ、どうぞ」と言っていて、そうしたら日本人の専門家で行かれている方が「もうそろそろ出産になりますけど、ごらんになられますか」と言われて、「えっ、見れるものなんですか」といって、そうしたらぜひ立ち会ってくださいというバングラディッシュの女性の方の許可を得て実際に立ち会ったんですけれども、やはり衝撃的は衝撃的でした。ただ、なかなか日本にいてもできる経験でもないし、その前にバングラディッシュの女性のあり方というものを聞いた直後だったので、どういう思いでこの出産を迎えられて、こういう経験をされたということは、またいろんな女性の今後にできるだけつなげていってもらって、そして一人でも多くの人が病院に足を運んでもらえるような環境になってほしいなというのは、その出産に立ち会ってすごく強く感じました。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 伊達さんは女性の出産にも立ち会ったと。バングラディッシュ、伊達さんのお話にもありましたように、大変妊婦の死亡率が高いんですね。

出産のときに感染して死ぬ。非常に不衛生な、助産婦さんといっても教育を受けた人じゃないんで、周辺地区の村状況では、出産のときにそこからばい菌が入って、そのために亡くなってしまうという悲惨なことが多い。特にこういった経済的に苦しいところだと、伊達さんにごらんいただいたのは、女性であるとか子供にしわ寄せが行っているというところを見ていただいた。伊達さんがそういったのを見た後の表情は大変厳粛な表情で、キッズテニスをやった伸びやかな表情とは違う面を私そばで感じ取りました。

キッズテニスの伸び伸びとしたお話は、また後ほど伺うことにいたします。

それでは次に、そういった意味では広範な海外協力、国際協力のあり方を身を持って実践なさっている、次においでいただいております鈴鹿国際大学国際関係学科教授でいらっしゃいまして、名古屋NGOセンター理事のアーナンダ・クマーラさんにおいでいただいております。アーナンダさんはもちろん日本語は流暢でいらっしゃいますが、今現在どんな活動をなさっているのか、まず自己紹介も含めてお話しいただきたいと思います。

【パネリスト（アーナンダ・クマーラ氏）】 皆さん、こんにちは。

スリランカという発展途上国から参りましたクマーラと申しますが、今は大学の方に教員としていらっしゃるわけなんですけれども、私も国際協力活動に今から10年ぐらい前に参加することになりました。そのきっかけというのは、日本に来てしばらくいると、私の知り合いがあなたの生まれた国に行きたいということで、一緒に向こうに行ったのがきっかけであるけれども、あのとき自分が自分の国にいるときにも感じなかった一つに気づきました。何かといいますと、観光地回り、世界遺産とかたくさんあるわけで、そういうところに行きましたが、行くと、我々のバスがそこに到着すると子供たちがたくさん走ってきて、ボールペンちょうだいとか、ノートちょうだいとか、そういう形で手を出してきていたわけですね。だから私と一緒にいった方も、かわいそうだなとか、勉強したくてもこういうものを親が買ってくれないのかなとか、できないのかなと思って、手元に持っていたものをお渡ししたわけなんです。その感動をしているうちに、そこにヨーロッパ人が乗ったバスが到着したわけですね。そこにも同じように子供たちが走っていったわけなんです。同じくボールペンとかノートをねだると思ったら、お菓子くださいとか、チョコレートくださいとか、そういうふうに言っているわけですね。あれは私ちょっと驚いたわけですよ。本当に勉強するための道具とかなかったら、それは向こうの方にも同じくお願いしたはずなんです。何でこの違いなのかと。後で知ったことであるわけなんです。外国の方が来ると、それぞれ何かお土産に持ってきてそういうものを渡していると。日本の方であればボールペンとかノートとか大量に持って行って渡していると、ヨーロッパ人とかだとお菓子をよく持っているということで、残念ながら悪い習慣をつけてしまったわけですね。

あの後、日本に戻られたみんなと一緒に国際協力活動、NGO活動をしましょうかとかいうことになりました。始めたのは職業訓練活動であったわけです。それもちよっとだけ数字を紹介したいと思うけれども、途上国でありながら、スリランカというのは小学校の

就学率が97%、非常に途上国の中では高いわけです。義務教育は9年間ありまして、今度、中等教育、日本で言えば高等学校ぐらいまでになりますけれども、その就学率が75%でありまして、それは非常に高いわけですよ。でも、次の問題が高等専門教育がどれぐらいかという、たった5%しかいないわけですね。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 それは大学レベル。

【パネリスト（アーナンダ・クマーラ氏）】 大学、短期大学、専門学校とかいう、本当に自立できるために必要な教育を受けられるところというふうに私たちは分析するけれども、あの5%というのは非常に少ないのかなと考えて、何とかして高い失業率も、あのあたりはちょうど20%ぐらいだったわけですよ、失業率は。だから、高等学校までは国の力で行けるけれども、その先へは進められないので、その辺を何とかしましょうかという話し合った結果が、最終的に職業訓練。非常に短期間で何かを身につけられるような知識を提供することによって、非常に短い期間で大変いい成果を上げてくれるという、そういうことが見られたわけです。

一つの例を紹介しますと、農業研修とかありますが、全部で7種類ぐらいの研修コースを実施するわけなんですけれども、たった2週間ぐらいの集中講座に参加した研修生が村に帰って、今度1年か2年ぐらいたってから我々が訪問するわけなんです、行くときに、以前は日本円にしますとたった600円、700円ぐらいしか収入がなかった、収入というほどでもなかったけれども、そういう人たちが、村に行ってみると、日本円にすると7,000円、8,000円とか1万円とか、そういうふうの収入を得られるようになる。ちょっとした手伝いを我々がすることによって、本当の意味で自立できるようになるということが見られたわけです。中には1年間で90万円ぐらいの車を、頭金を60万円ぐらい自分で出して買ったりすること、あるいは2年間で100万円ぐらいの家を自分で建てるとか、そういうケースも出てきていて、なぜそれが実現できたかという、中等教育の率が非常に高いということで、教えられてもすぐ吸収できるということであるわけです。だから、今、もっともっとそういう成功例を出せるようにということで、日本の皆様と一緒にボランティアとしてはそういう活動を行っているところであります。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 クマーラさんは、日本の鈴鹿国際大学の学生とともにいろいろな活動をなさっていたり、交互に学生を連れてそういった海外の実態なども見せる。日本の学生にもいろいろと注文があるということなので、また後ほど伺いたいと思います。

今のクマーラさんのお話は、言ってみれば国際協力のあり方の本質的なところで、本当に必要なものをどう援助できるかと。つまりお菓子やボールペンや鉛筆、向こうの欲しがるものだけを与えてくるのではなくて、一つのリーダーを育成する。そのことによってその地域が非常に活性化していくという、自立援助の具体的な方策をNGOとしてやっていく。つまり、援助のあり方をもう一回考え直すのではないかと一つの議論の取っかかりにもなるかと思います。また後ほどクマーラさんのお話を伺いながら、みんなで話し

合っていきたいと思います。

さあ次は、こう言うのはなんですが異色の方でございまして、斎藤弘之さんは、現在、安城市の歴史博物館の学芸員、キュレーターをなさっているんですが、実はご自身が青年海外協力隊でミクロネシアの方に行かれておりました。現在は愛知県の青年海外協力隊のOB会長ということで要の役割を果たしていらっしゃるんですが、そもそも斎藤さん、協力隊員になろうと思ったのはどういったことからだったんですか。

【パネリスト（斎藤弘之氏）】 もう今から10年ほど前のことなんですが、年齢にして30歳を目前にしまして、ある日、何を思ったのか、自分がちょっと年取ったなというふうに思う瞬間があって、今でも私はまだ若いつもりですが、若いころに何ができるのかなというのをちょっと考えたことがあるんです。そのときに、たまたま高校時代の恩師が理数科教師ということで協力隊に参加していたことを思い出して、だったらまだ若さが自分の中に残っているうちに協力隊に行ってみようということを思って、そもそもそこから私の国際協力の活動が始まったわけです。それまでは、私は海外ボランティアですとかNGO活動に特に興味があったわけではなくて、協力隊に参加したことがきっかけになり、そして現在の自分があります。

協力隊の仕事といいますと、この中にもしかして将来行ってみようかなという方がいらっしゃるかもしれませんが、一般的には農業関係とか漁業関係、それから機械の修理ですとか医療関係、あと学校教育という分野がまず第一に思い浮かぶかもしれませんが。ただ実際には、伊達さんもきょういらっしゃるんですが、テニスですとか、さっきのビデオにも出てきました体操、それから日本の柔剣道、最近ではシンクロナイズドスイミングというのがあります。それから音楽に美術、私が担当したのは考古学という分野です。こういうことをして直接おなががいっぱいになるわけではありませぬし、医療が充実して死亡率とか病気の割合が下がるというわけではないんですが、私は「文化的勇氣」というふうに呼んでいますが、直接生きていく上では関係ないかもしれませんが、生きるための励みですとか、私の歴史の分野で言えば、私たちは一体どこからやってきて、どのように私たちの祖先が生活を営んできたということを考えることは、これから私たちはどの方向へ向かっていけばよいのかということを考える上で必ず触れなければならないテーマだと思っております。そういう文化的な分野にずうっと携わって、そして今も安城市の歴史博物館の学芸員、地域文化を取り扱った博物館ですけれども、そこに勤めております。

実は現在、協力隊のOB会というのがありまして、ここで活動をしております。OB会はどういう活動をしているのかとよく言われますが、ただ単に戦争の戦友会みたいな昔話云々というばかりではなくて、そういうお話も皆さんとよくしますけど、まずは私たちの貴重な体験を社会に還元しようと。皆さんにいろいろ知っていただくということで、あちこちに話しに行ったり、私たちが撮ってきた写真をパネルにして展示をしたりということを行います。

それから、NGO的な活動ということで、私はミクロネシア連邦という太平洋の小さな

島の国にいましたけど、何かできることはないかというふうに今も考えています。あるOBはプライベートの奨学金制度をつくって、それをネパールの子供たちに毎年少しずつ与えたり、それからフェアトレードとあって、現地の人がつくったものを日本で売って、その売上金を現地の人に還元して経済的な自立を図ろうという活動をメンバーの中ではやっています。それから、私が今ちょっと力を入れてやりたいのは協力隊に行ってから隊員の再就職の問題、これは日本の社会経済そのものが現在停滞した状況にあるので、ある程度仕方ないことですが、なかなか苦戦している連中が何人かいます。それを何とかして日本の社会に私たちの経験が還元できないかということを考えております。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 はい、ありがとうございました。

斎藤さんご自身は考古学がご専門で、これは非常におもしろい視点でありまして、我々は海外協力で行くとなると経済的な援助、目に見えて、例えば農業で作物をつくるとか、井戸を掘るとか、すぐに成果の見える援助のあり方をイメージするんですが、文化的なところ、例えば伊達さんのキッズテニスも一つのあり方だと。これは本当に飢えている人たちにとってどういう意味があるんだというようなところを考えたいというところも含めて、またこれは後ほど伊達さんにキッズテニスの活動なども含めて、一体何を私たちは向こうの人に援助という形で手渡せばいいのかというところもお話しいただきたいと思いません。

さあ次の方です。荻原久義さんです。ここのJICA中部国際センターの所長でいらっしゃいます。言ってみればこういった援助の多様なあり方の取りまとめ役であります、今どんなことを援助のあり方として考えていらっしゃるのか、そのあたりをお話しいただきたいと思えます。

【パネリスト（荻原久義氏）】 斎藤さんが、今、社会に還元ということをおっしゃっておいりましたんですが、実は私の今の最大のテーマはその1点でございます。私はもう既に30年近く国際協力の道に働いておりまして、訪問した国も110ぐらいに上っております。そして、いろんな国を訪問して、いろんなことを考えさせられて、いろんな感動をたくさんいただいております。そして、人のいるところはどこへ行っても何かすばらしいことを感じるところがあると、そういったのが30年を通して私が感じたことでございます。そして、途上国といいますと、皆さんはすぐ貧しいとか、暗いとか、悲惨だとか、こういう言葉だと思うんですが、伊達さんの言葉にもあったように、そこには非常に元気な輝いた子供たちがたくさんいるわけです。そうすると、ますますいろいろ考えさせられるわけです。

例えばスーダンに行ったときのことを思い出しますと、スーダンという国は砂漠だらけですね。その砂漠だらけの国から、さらに南に250キロほど行ったところにエドデウムという町がございました。ホワイトナイルとブルーナイルの交差点なんです。その村にきょう出かけると。砂漠の中をずうっと旅をしていくわけですが、実は旅の途中には道路がございません。そして、砂漠を車で走っていくとキャブレターに砂が詰まって必ず車が

とまる。そうすると、運転手がどちらの方向に走っているのかわからなくなると。そうすると、指を口の中に入れてこうやるわけですね。何をやっているのと言ったら、風がどちらから吹いてくるか今調べていると。いやあ、えらいところへ来ちゃったなと思ったんですが、そういった砂漠のど真ん中にも人が生きているわけですね。井戸を掘ってみんな生きているわけです。ところが、そういった生きている人たちは皆それぞれ一生懸命生きているわけですが、厳しいところへ行けば行くほど何を僕が学んだかといいますと、実は大変皆さん心が温かいんですね、助け合っているんです。逆の言い方をすると、助け合わないと生きていけないんですね。それで、ちょっと豊かな国へ行ってみる。そのときはどういう感じになるかという、助け合いと温かさというのが徐々に薄れていく、そういうのを感じております。

それで、先ほどの斎藤さんの社会に還元ということになるんですが、30年にもわたる途上国での経験が、今、この日本で何か役に立つんじゃないのかなあと、そんなふうを感じております。実はこの名古屋に、あるいは愛知県には、この中部地区には、日本でも皆さんご存じのように、トップクラスの長期滞在者がおるわけです。名古屋大学には日本でもトップクラスの留学生がいるんですね。それで、こういう人たちがなぜここに来ているのかと。そういうことも僕なんかは考えるわけですね、どうして皆さんここへ来ているのかなあと。そして、考えて聞いてみると、恐らく皆さん方は何か理由があってこの愛知県に来ているんだろうと思うんです。そして先ほど冒頭のごあいさつにも申し上げましたが、いろんな要素があってこの中学生や高校生が非常に関心を深めている、そういう結果になっているんじゃないのかなと。そうすると、私は別に皆さん方にお世辞を言うわけじゃないんですが、世界じゅう旅ばかりしている人間がここに来て1年暮らしてみると、ここに海外から来ているにはそれなりの理由があるというふうに僕は思うんですね。それは恐らく自然もいだろうし、人々の心も温かいだろうし、何かいいところがあるんです。

それで、この前も保見団地の人に、なぜブラジルの人が保見団地にみんな来ているのか理由が僕わかりましたよと伝えたいです。実はブラジルの方は保見団地が好きなんです。あの広大な風景はブラジルと一緒になんです。広大なブラジルの国土は、国土と同じように人々の心も広いんですと。好きだと言え、あついいよ、ここへ暮らさないと、私は言われたことがあります。保見団地の方は、ブラジルの人に好きだと言われているんじゃないかと僕は思います。好きだと言われたら、あなたどうするんですかと。僕だったら抱きしめますと答えたんですが、それが当たっているかどうかわからないんですが、やはり考える必要があるんじゃないのかなと。それで、私はそういう自分の見方とか考え方、感じ方をできる限りその子供たちに伝えて、それでこの子供たちがより広い視点に立って歩いていくと。国際協力というのは海外のことだけじゃなくて、実は私たちが元気になる一つのきっかけになるんじゃないのかと、そんな思いがしております、その意味で社会還元で国際協力は大きい役に立つと、そんな思いをしているのが昨今でございます。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 はい、ありがとうございました。

今も言ったように、元気になるという話もありました。次の子供たちの話も荻原さんの方から出ました。

せっかく伊達さんがおいでになっているので、伊達さんの大きな一つの活動でキッズテニスというのがあります。これも各地で、中国、ベトナム、そしてバングラディッシュと。

【パネリスト（伊達公子氏）】 そうですね。以前にはニューヨーク、そしてパリの方で日本人学校の子供たち、そしてその後中国では現地の中国人の子供たちと日本人学校の子供たち、そして日本では毎月全国を各地回っているんですけど。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】きのうは名古屋ですね。

【パネリスト（伊達公子氏）】 はい、きのうは豊田市の方でやったんですけども、このキッズテニスをまずやろうと思ったきっかけというのが、96年に私は現役のテニスプレーヤーとして引退をしたんですけども、その後、自分なりにいろんなことを考えたときに、本当にいい環境でいい人たちに恵まれて、テニスというスポーツに出会って、その出会ったテニスの中からもいろんなことを、ただテニスがうまくなって強くなる、世界的なプレーヤーになるということよりも、人間としてすごくいろんなことをテニスを通じてスポーツから学んだんじゃないかなというのをすごく感じて、そして今の世の中を見てみたときに、少年の犯罪の問題があったり、いじめの問題があったり、少子化の問題があったりしている中で、今の子供たちは本当に夢を持っているのかなと思ったときに、なかなか夢を持たない、外で遊ぶ時間も少なくなっているということを見ると、自分が与えてもらった環境のように今の子供たちはならないケースが多いのかなと思ったときに、できるだけ子供たちにきっかけを与えてあげて、本来持っている子供たちの可能性を引き出すきっかけになればいいなと思ってキッズテニスを日本で始めたんですけども、中国に行ったときに、今まで私自身が世界をベースに戦ってきたのにもかかわらず、引退をしてキッズテニスを始めたときに、純粹に私の中には日本をベースにというのが頭に出てきたんですね。その自分の直観というか、自分の思うがままに日本をベースにずうっと活動をやってきたんですけども、中国に行ったときに向こうの方々に「アジアの伊達公子が来た」というふうに言っていたんですね。そのときに、あっ、中国側の、アジアの人たちから見たら、日本の伊達公子が中国に来たということではなく、アジアの伊達公子、テニスプレーヤーが中国に来たという見方をしてくれているんだなと思ったときに、私は何て小さい考え方をしていたんだろう、なぜ日本ということにとらわれてキッズテニスを始めたんだろうというのがきっかけで、日本ということにとらわれずに、自分が少し枠を広げてアジアの子供たちにもそういう機会を持てるのであれば、アジアの子供たちとも接する機会を持って、同じように子供たちの可能性を広げたり、スポーツの楽しさを伝えたいというふうに少し枠を広げられるようになって、そしてその後JICAと一緒にベトナムに行き、そして今回、バングラディッシュに。その中で、JICAと一緒に初めて行ったのが、先ほどビデオにもあったようにベトナムだったんですけども、そこで初めて隊員の人たちが活動している姿を見たんですね。私も、一番多いときであれば1年の半分から3

分の2を海外で過ごすことがあったんですが、18歳で高校を卒業した直後にプロに転向して、そして海外でホテル暮らしを転々としていたんですけれども、やはり18歳で日本から高校を卒業していきなり海外に行って、いきなり食事も違う、言葉も英語を話さなきゃいけない。そして、テニスというのは個人スポーツなので、だれかがすべて自分のコーディネートをしてくれるわけではないので、飛行機の予約、ホテルの予約、練習コートの確保、練習相手を探すことから、すべて自分でやらなきゃいけなかったんですね。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 世界の伊達公子も、全部コートの予約だとかホテルの予約も自分でやるんだそうですね。

【パネリスト（伊達公子氏）】 そうですね、はい。団体競技であれば、チームの団体のだれかが準備をしてくれて、自分はぼんと飛行機に乗って、ぼんとホテルに連れていかれてということもあると思うんですけれども、テニスの場合、全くの個人なので、タクシーを拾って高い値段を取られたりとか、予約をしていたはずのホテルが予約が入ってなかったとかということも、すべて身ぶり手ぶりで最初はやっていかなきゃいけないので、そういう苦勞もしながらコートで戦っていて、試合をやっている、これを負けたら何をやらなきゃいけないのかなど、試合中にホテルの変更、飛行機の変更とかいろいろ考えながらやっていたんですけれども、自分もかなり、苦勞と言うことは好きじゃないんですけれども、いろんな悩みを抱えたり、不安を抱えながらずっと戦ってきた中でその隊員の人たちを見ていると、大変なことはたくさん、ただ旅行で1週間、2週間海外へ行って、ああ、こういう生活もいいなと思うことも、それが先進国であれ、途上国であれ、あるとは思いますが、やっぱり実際に生活するって違うと思うんですね。なので、そういうところから隊員の人たちの苦勞、不安というのはすごく、多分、私がわかっていることは限られているとは思いますが、それでもほんの少しは共感できる場所があったので、その隊員たちがまずは興味を持って行動に移したということが、まずすばらしいことだなというのをベトナムで隊員の人たちと接したときにすごく感じたんですね。なので専門家の人たちが実際に技術協力、そしてお金の援助ということももちろんありますけれども、そういう形で現地の、ベトナムなりそういう国で援助をされていることの大きさというのは、実際に目で見て感じたことというのは非常に大きかったし、私はテニスで生きてきた人間なので、スポーツを通じて、そしてテニスを通じて、子供たちに夢を持つことのすばらしさ、これは日本の子供たちにも言えることかもしれないんですけれども、夢を持つことすら少なくなってきたと思うんですね。そういうことをよく聞くこともあるし、子供たちと接しても感じることも多いし、それが途上国の子供たちにも、やはりどんなに思いを持っていても、それを道にする手段がなかなか見つけられないという子供たちも途上国では多いと思うんですね。そういう中でも夢を持ち続けていくことのすばらしさということ、テニスを通じて伝えていきたいなということ、思いながらキッズテニスをやっています。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 バングラディッシュでも、向こうの青年海外協力隊

員のスポーツ隊員と呼ばれる皆さん、ハンドボールをやったり、水泳を教えたり、テニスを教えたりする。さっき斎藤さんがおっしゃったように、これはおなかがいっぱいにならない一つの、テニスをやっても、あした食べるものが別に入ってくるわけじゃない。どういうねらいでキッズテニスをアジアの子供たちに教えているんですか。

【パネリスト（伊達公子氏）】 まずは夢を持つことのすばらしさ。そして、私はテニスで海外に行く機会が多かったので、その中で自分で日本と比べたときに、何か違うんじゃないかな、何かおかしいんじゃないかなと。何げに現役のときに選手という立場だったので、コートに入って自分の表現する場所はコートに立って勝つことだというのが最優先だったので、あまり外のことをいろんな角度から見たりする余裕というのは正直なかったんですね。でも、その中でいろんなものを見たり、人と話したりする中で、何か違うんじゃないかな、何かおかしいんじゃないかなと思ってきたことが、やっとなんてテニスをやめている人に出会ったり、いろんなことを見たり、ほかのスポーツを見たり、こうやっているんならいろんな国を訪れたりする中で、あっ、自分がおかしいなと思ったことはこういうことだったんだと思うことが、今まで点であったものが線になってつながってきたことがあったんですけれども、その中の一つとしてJICAのオフィシャルサポーターとして活動する中で、子供たちとの接点で、私はただスポーツはうまくなるためじゃなくて、本来は人間としてどう成長するかということが大事なんじゃないかなと、私はそうやって教えられてきたし、その中でテニスというものが自分の中で存在が大きくなって強くなっていったという結果につながったんですけれども、決してそれだけが目的でテニスというものをやってきたわけじゃないので、それがあの人にとってはスポーツかもしれないし、ある人によってはまた違う分野でのことになると思うんですけれども、私はスポーツのすばらしさというものを極力子供たちに伝えた中で、人間としてどう成長していくかということ伝えていきたいなというのを一番強く思っています。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 私、今回、伊達さんと一緒にバングラディッシュを、キッズテニスの様子もごく間近で、一緒になって見たんですけど、さっきのベトナムのVTRを皆さんごらんになってわかると思うんですが、要するに子供たちと一緒に楽しむんですね。伊達さんが最初に打ち合わせのときに言うのは、コーチの人やいろんな協力する人、現地の人もいます。教えなくてくださいと、トレーニングしないでください、一緒に遊びましょうということをするんですよね。

【パネリスト（伊達公子氏）】 子供って非常にすばらしい可能性を秘めているというか、本来持っているものだと私は思っているんですね。それを周りにいるご両親だったり大人がどうやって子供のその可能性を引き出してあげるかということが大切だと思うんですけれども、それを今はどうしてもすぐに最初から教えてしまったり、答えを投げかけてしまったりしてしまうと思うんですけれども、そうすると子供って考える能力というのを、持っているものなのにそれを使わなくなってしまうんじゃないかなと思うんですね。なのでテニスにしても、グリップはこう持つんだよじゃなくて、自分でグリップを持って

みて、どうやったら一番打ちやすいかというのを子供は考える能力を持っているし、ラケットを渡してボールを渡せば、どうやって遊ぶかというのは、道具がなくても、子供って考える能力は、多分皆さんも経験があると思うんですけど、やってきたと思うんですよ。でも今、日本というのは物にあふれていて、何でも手に入る社会だと思うんですけども、それをやってしまうことによって子供は考えなくなってしまうということにつながっていると思うので、極力私は何も言わずに、少しだけサポートをしてあげることに徹しているんですけど、なのでコーチには極力教えるのではなくて、一緒に遊ぶことをまず考えてくださいねということを行っています。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 これは言うのは簡単ですけど、現地で見ていると、やはり世界の伊達公子が来たというんで、偉いお役人もいるわけですよ。学校の先生も全部ついていて、みんなお行儀よくしましょう、騒がないようにしましょうというふうに言うんですね。それをまた日本のスタッフが、そうじゃありません、きょうは遊んでくださいと。このやりとりが大変で、ともかく遊びましょうと。

私、そばで見て非常に印象が強かった、楽しさを覚えてほしいと。つまり、教えるとそこで見事にできるかもしれないけど、伊達公子がいなくなったら一回で終わっちゃうんです、イベントで。ただ、テニスの楽しさを知るとまた続けられる。全部ラケットもネットも置いていくんですもんね。

【パネリスト（伊達公子氏）】 はい、そうですね。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 だから、ぜひそれを続けてくださいと。斎藤さん、これは大事なことですわね。

【パネリスト（斎藤弘之氏）】 そうですね。そうした精神的な励みとか、心の御飯というふうに先ほどちょっとおっしゃられましたけど、そういうものが、間接的にですが、国づくりに役立つと。仕事をしなさいと。ただ与えられた仕事をただこなしていくだけの、能力は確かに教育によってつくることができるかもしれませんが、けれど、それをやったら何にも楽しくないんですもん。ただ、何かスポーツでも、芸術の分野でも何でもいいんですが、それこそイベントでも結構でしょう。何かやり遂げたときの楽しさということの子供のうちからわかっていると、例えば私なんかでも仕事をやり遂げたときの充実感というのはやっぱりあります。それはどうやって育ててきたかという、私も子供のころスポーツをやっていたり、何かイベントを、例えば児童会とか生徒会とか何とかもありましたけど、そういうことをやっていくうちに備わってきたんだと思います。そういう分野というのは直接目に見えないけれども、国づくり——私の場合だと地域づくりもあるんですが——からすると大変重要なことだなというふうに思います。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 着実に次の時代を担う子供たちに何か自分の生きる力みたいなものを与えたいというのが伊達さんだと思うんです。でも翻ってみると、日本の子供たちと違って、むしろ向こうの子供たちから教えられる部分も随分あったんじゃないですか。

【パネリスト（伊達公子氏）】　そうですね。日本でのキッズテニスは、ちょうどきのうの豊田市で丸5年になるんですけれども、延べにして1万5,000人強の子供たちと接してきたことになるんですけれども、非常に日本の中でも特徴が、それぞれ地域性というのが時々見られることもあるんですけれども、その中で日本と中国、日本とベトナム、日本とバングラディッシュという子供たちと比べたときに、やはり個性という面では日本は負けてしまうんですね。特に私はスポーツの世界にいたからかもしれないんですけれども、個性ってすごく大事なことだなというのはすごく感じていて、日本ってどうしてもみんなと同じことがよしとされることが多いと思うんですね。みんなと違ったことをしないで、みんなと同じことをしているということがいいというふうによく言われて、私もたたかれることが非常に多かったんですけれども、でも世界のトップテンの選手を見ていれば、私もお手上げというぐらいの負けず嫌いがそろっていたり個性豊かな人たちが多いため、やはり何か自分の世界というものをつくっていくためには、個性というのはこれから非常に大切な要素になると思うんですけれども、その点で言うと、今回バングラディッシュで見えた、出会った子供たちも個性豊かなんですね。だから、言われたことをきちっとやるということもすごく大事なことだし、それは一つの能力で、私は子供は非常にいろんな能力を持っていると思うんですね。なので、私はキッズテニスを通して2時間なり1時間半内の限られた時間でしか子供たちと接することがないので、1人の子供たちとは。そうするとその中で極力いろんな子供たちの才能を引き出してあげて、子供自身が気づいてくれるようにその時間の中で感じてもらえるように思っているんですけれども、例えば10球ボールを打ったときに、1球目にうまく打てるというのも一つの能力だと思うんですけれども、10球うまく打てなくても、10球やり遂げるということも一つの能力だと思うんですね。10球やっている中で、1、2、3、4、5、6、7、8、9とうまくいかないけど、10球目にできるのも一つの能力だと思うので、いろんなご両親が周りから見ていると、何で自分の息子はできないんだ、娘はできないんだと怒るご両親もいらっしゃるんですけれども、でもそれを違った角度から子供を認めてあげるというのはすごく大事なことだし、そうやって見てあげると子供の個性というのはもっともっと広がってくるんじゃないかなというのがすごくいつも見ていて感じるもので、個性というのがアジアの子供たちにはすごく強いんじゃないかなという気がしました。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】　外から見て見えてくるものっていろいろあると思いますね。

【パネリスト（伊達公子氏）】　そうですね、多いですね。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】　さっき言った、アジアの伊達だと言われたというのも、外に行ってみると、伊達公子さんというのは我々は日本の伊達公子だと思うんですけど、みんな受け取るのは、我々と同じようなあんな小柄で世界のランキングのトップクラスへ入ったということは、みんなアジアの人は自分たちの誇りのように思っているんですね、そういう見方もされる。今、子供のことを伊達さんはおっしゃいましたけれども、

確かに日本の子供は成熟社会で物が豊かで、特に欲しいものもないというふうになっていると、逆に夢を持ってなくなっている。貧しい国は確かに恵まれないけれども、やれば何か確実に手に入るというものを持っている。ある意味で、彼らの、子供たちの方が未来は開けているかもしれないなど、そんな感じも私は持ったんですけどね。

バングラディッシュというのは、皆さんよく名前だけは知っているのは、多分、世界で最も貧しい国だと、援助されている国ということで名前は日本人はよく知っているんですけども、現地の方は、バングラディッシュというのは国民総生産は確かに一番低いかもしれない。だけど国民総元気は世界一だ、こういうふう言うんですね。行ってみると本当にそうなんです。停滞したこの気分の日本から見ると、すごい活気なんです。伊達さんも最初におっしゃいましたリキシャーにしても、人もあふれていますもんね。

【パネリスト（伊達公子氏）】 そうですね。信号がない、車線がない、歩道がない、みんながぐちゃぐちゃになっていて、その中大渋滞で、車が非常に多かったので、その中を車が走っていきようが人が渡っていくんですよね。そこをくぐり抜けていくという、その人のパワーというのはすごいなというのをすごく感じましたね。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 あのパワーが何かへ向かっていったら、あれが秩序立てられたらすごい力になりますよね。

【パネリスト（伊達公子氏）】 私は非常に可能性を秘めている国だなというのをすごく感じました。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 逆に我々は可能性が見えないまま21世紀へ突入してしまったわけですが、さっき打ち合わせしていたら、クマーラさんがご家庭で奥様と一緒に、伊達さんというのは我々が試合を見ているアジアの伊達公子だよとずっとおっしゃっていましたが、もう一方でクマーラさんは学生の皆さんと一緒にアジアに行って、もっと日本は援助する側じゃなくて実は学ぶべき点が多いんじゃないかと、そのことに気づいていないんじゃないかとおっしゃっていて、そのあたりをちょっとお話しただけですか。

【パネリスト（アーナンダ・クマーラ氏）】 ここでちょっと一つ自分の仕事と関係があるものを紹介したいと思うんですが、私どもの大学では1年生で学生が入ってくると全員を外国に行かせます。これは大学の費用で送りますけれども、理由は、学問が国際学部であり、専門語そのものを学校で学ぶよりは、外国に行くと学ぶものが非常に多いのではないかとということで行かせることを3年前から企画して実施することになりました。それで、コースはいろんな国があります。タイもあれば、ネパール、スリランカ、マレーシア、シンガポール、いろんな国がありますね。カナダ、ドイツとかヨーロッパの国もありますけれども、一つ大きな驚きがありました。何かというと、途上国で最も貧しい国として、我々が準備したコースの中ではスリランカとネパールで二つありますね。そこに行きまして、特にその二つの国に関してはボランティア活動などに参加するわけなんですけど、先ほど私が自分が今ボランティア活動をやっているという話で紹介した、その活動そのもの

のがスリランカのホクセイ州で一番貧しい、向こうの言葉で言えば低開発村と言いますが、あるいはリースディオラカルティスと言いますね。リースディオラヴィレジエスと言いますが、あの村に行くとももちろん道路ありません、水道ありません、電気はあるわけがありません。でも、行ってみるとほとんどの若者が中学校ぐらいは何とか出ていますよ。村には中学校もないんですよ。じゃあどうかというと、朝4時ぐらいに起きて、何とか学校が始まる時間までにたどり着くほどの距離を歩くわけですね。ちょっとお金があれば自転車に乗っていくということになっているわけなんですけど、そういうものを見るんですよ。僕らもちろんバスで行くわけですから、村にはバスが入れないわけですよ、途中から。だから、そこで耕運機に乗りかえて村に入ったりするけれども、あそこに行ってあの子供たちと少し交流して、得られるものの方が物すごく多いわけですよ。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 それは日本の学生にはどんなことが印象に残るのでしょうか。

【パネリスト（アーナンダ・クマーラ氏）】 まず、私は何とかして多くの日本の皆様にそれを伝えたいなと思っていることでもありますけれども、日本には皆さんの周りにどれほど宝物があるのか皆さん考えたことがありますかね。というのは、例えば若い者にすれば勉強するのは一番ですよ。日本の場合には勉強ほど嫌いなものはないんじゃないですか、恐らく。だから、また勉強しろと言われた、勉強というのは親から言われてするものというのが恐らく一般的なイメージかと思いますね。先ほど伊達さんの話でも出てきたわけなんですけど、やっぱり可能性があるわけですよ。その可能性はどうやって引き延ばすかというのがポイントであるわけなんですけど、それは国際協力という形でもたくさんできるものもあろうかと思いますが、例えばスリランカで言えば、ある程度教育を受けた人に、もともと持っていた能力を生かせるような形でTFDが活動したというのが1点。

もう一つは、そのTFDというボランティア団体があるけれども、ボランティア活動というのはどこかの国のどこかの地域で同じ村でずうっとやるわけですね。でもTFDは約100村を対象にしてやっているわけですよ。本当の小さな団体ですね。これもやり方、我々の方で少し専門的に考えればいろんなものができるわけですよ。これが二つ目の点。

三つ目の点は、ボランティアというのは年配の方が時間があり余って結構やるんだなというイメージもあるかもしれませんが、なるべく若い人に入ってほしい。なぜかという、若いのであればこれから自分の人生を幾らでも変えられるわけですよ。年配の方が変えられないというわけではありませんが、でも若い方がもっと生かされるわけです。先ほど言いました低開発村に行けば学校はあるわけない。夜になったら、勉強したくても電気がないんですよ。でも何とかして頑張っているわけですね。ああいうあたりを見ると、日本の学生が今まで何でこんなすばらしい環境にいて気づいてなかったのかということを感じくわけですね。だから、大学の方のアジアの最も貧しい国々あたりを対象にしたコースに参加する学生と、シンガポールとかカナダとかドイツとか、そういうところに

行った学生の違いというのは、シンガポールとかへ行くと、便利でした、料理がおいしかったとか、そういうふうに戻ってくるけれども、ネパール、スリランカに行ってくると、やっぱり私たちがもうちょっと頑張らないといけないと思う、そういうふうに戻ってくるわけですね。先ほど言いました驚きというのは、うちの大学だと卒業するときには何名かの優秀な学生を表彰するわけですね。必ずあの二つの国に行った学生が入るわけですよ。というのは、向こうで何か専門的な科目を学んだわけではありませんが、やっぱり自分たちが能力あるよと、これを生かさないもったいなというふうに思うようになった、その一言だというふうに思いますね。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 その点では、伊達さんも現地で青年海外協力隊の若者たちと交流しましたが、どんなことを感じましたか。

【パネリスト（伊達公子氏）】 やはり皆さんに、この協力隊員になるきっかけは何だったんですかというのがまず一つ私の興味があったことと、そしてこちらでの生活というか、期間はどうかということをご皆さんに大体聞いていたんですけれども、やはり自分が思い描いていたものと現実とは随分違うところはあるんですけれども、だれもそこで教えてくれる人はいないんですよ。なので、現実と自分が思い描いていたものとのギャップを埋めるためには自分で切り開いていくしか道はないので、もちろん言葉の問題もあるし、そこを2年間という期間の中で、2年間というのは長いようで、多分あつという間だと思うんですね。やっとなれてきて、いよいよ自分はこれからだと感じたころにはもう帰ってこなきゃいけないころなんじゃないかと思うんですよ。それになれないままという人も、もしかしたら中にはいらっしゃるか、どうですか、斎藤さん。

【パネリスト（斎藤弘之氏）】 あるかと思います。

【パネリスト（伊達公子氏）】 そうですよ。その中で、私もそうだったんですけれども、レールを敷かれたところを歩くのはすごく嫌いだったんですね。なので隊員の人たちは、多分、日本にいたら、もしかしたらレールを敷いてもらったり、レールがあるところを選んで歩いていく道が多いかもしれないと思うんですね。でも、現実になったときには自分でそのレールを敷いていくしかない。そこで私が見ていて、もちろん苦勞も多いし、不安も多いし、自分が何をしたらいいのか、何をすることがいいのか、そしてほかの国から専門家で来ている人たちと自分を比べてみて、自分が何ができているのかとすごく悩むことも多いんだなというのは話していて感じたんですけれども、でもその中で自分ができていることが、今、瞬間、瞬間を生きていくことってすごく大事だし、それもそうなんですけれども、トータルで自分が5年、10年というスパンで見たときに、すごくその2年間というのは大きな財産になると思うんですね。そこで得た、自分がもしかしたら与えてあげようという気持ちで行っていたかもしれないけれども、実際には与えてもらった財産の大きさというのは、やっぱり5年、10年とたったときに、もっともっと気づくんじゃないかなという気が私はすごくしましたね。でも、その中で投げ出さずに帰ってこないというのは、それだけ自分がそこにいてできることの充実感というのを、もしか

たら苦勞が80%で自分の充実感はそのときは20%ぐらいかもしれないけれども、でもその20%、私もそうなんですよね。キッズテニスをやっていて、すごく充実しているけど、最後に子供たちが楽しかった、また今度はいつ来てくれるの、いつ一緒にできるのと言ってくれる一言で、やってよかった、またやりたい、またいろんな子供たちと出会いたいと思う。100%常に満足してやっていくというのは難しい。そりゃあ仕事をしていてもそうだろうし、何をやっていても同じだと思うんですけども、なのでそれがあるからこそ2年間をやり遂げられるだろうし、その充実感を感じられるんじゃないかなという気がしましたね。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 伊達さんもキッズテニスをやって与えられるものが多いということですね。

【パネリスト（伊達公子氏）】 多いですね、子供から教えられることも多いです。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 私も向こうの協力隊員といろいろ話をしたんですけども、確かに伊達さんの言うように大変なんですよ。バングラディッシュだと総人口1億人で50人とかそのぐらいですから、自分のやっていることが本当にバングラディッシュという国をよくしているんだろうかと悩み出すと、何の役にも立たんじゃないかと、夜中ぼつんと日本人一人だけで村の中で悩むことがあると。でも翌日は、また子供たちや向こうの人たちを見るとやるぞというふうに思うという、大変で厳しさや悩みもたくさんあると思うんですけども、そういった大変さを楽しむことができるというのが大変うらやましいな。日本の若者と接していても、日本の若者は上司の愚痴をずうっと言う場合が——私は言われる側なんですけども——多いんですけども、齋藤さん、協力隊員が得られるものというのは随分大きいでしょうね。

【パネリスト（齋藤弘之氏）】 それぞれ国や地域によって全く違うんですが、例えば私の経験ですと、先ほどのビデオですと隊員はひとり暮らしをしていました。ところが私はホームステイだったので、現地に行って、基本的な社会の仕組みとかをちょっとレクチャーを受けた後、ステイ先のホストファーザーがピックアップトラックでやってきて、おまえがおれんところに来るんだからここに乘っていけというわけで、当時、私が赴任したときはまだ舗装道路があまりなくて、それこそ職場のある町から車で2時間のがたがた道連れていかれて、周りには、そのときは電話はなかったんだけど、電気がようやく来始めたというところでした。私の任期中に島の中だけ通話ができる電話が引かれたようなところで、周りは熱帯雨林のジャングル。一応部屋は与えられたんですが、子供たちとかは一緒に雑魚寝。朝、日の出ぐらいにみんなでごそごそ起き出して、ホストファーザーが同じ職場だったもんですから、仕事に行こうということで車に乗せられて行って、ただ、現地のことですので、9時から仕事が始まるといっても9時にはだれも来ていませんけど、5時まで仕事をするんですが、4時半にはみんないなくなってしまうので、帰っていくと。帰ると、サカオという現地の地酒、アルコール分は入っていないんですが、麻酔の成分がちょっと根っこに含まれているもんですから、飲むと体の力が抜けて気持ちがよくな

るという酒を毎晩のようにつき合わされて、そのときいろいろ話をすると。言葉は公用語が英語。というのは、私のいたミクロネシアは島ごとに言葉が違うもんですから、英語を公用語にして教育とか政治とかはやっているんですが、家に帰ると現地のポンペイ語という言葉。毎日私はメモを持って、これは何て言うんだ、これは何て言うんだということを言いながら、メモをとって言葉を覚えていくというようなところでした。

確かに大変で、食事も合わずに、最初の半年で10キロほどやせたりもしました。ただ、今から考えると本当にいい思い出というか、あれができるんだったらこれはできるだろうということ。それから、今、私がその2年間の経験で一番よかったなと思うのは、未知の分野に飛び込んでいっても、最初はすごくもがいて苦しいんですが、だんだん方法を覚えて、そこに同化して行って、その後、自分の考えを中に出して行って組織を変えるというようなことが体験的にできるようになったと。これはすごく自分の中でプラスになって、ですから未知の団体だとか、未知の団体って変ですけど、私なんかはいろいろなところから声がかかって行くんですが、別にそういうことに対して物おじせずにとんどん入っていくという、そういうのは大変自信になりました。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】クマーラさんも、スリランカ、ネパールという一番貧しい国へ行った学生が一番大きなものを得て、その後の勉強に対するモチベーションもぐっと上がっていくことが実際にあるんだというお話もありました。恐らく会場にきょうは若い世代の方もいらっしゃるって、さあ、じゃあおれも、私も青年海外協力隊、あるいは国際協力というのをやってみたいんだけど、でもどうやっていいんだかわからない、あるいは海外に行かなければならないのかとか、国内じゃできないのかといろいろあると思うんですね。そのあたりどういうふうになっているか、荻原さん、まずやってみようと思ったときにどうしたらいいですかね。

【パネリスト（荻原久義氏）】実は、今はたくさん機会がふえているんだろうと思います。それで、そういった機会の一つが「伊達公子と語ろう」ということも言えるんじゃないのかと。それで、こういった機会に参加する、それで参加して何かを感じる。それで感じると、次のステップはそれを行動に移すと。そして体験すると、また感動があるわけですね。この循環をしていくということで、きょうここに参加された方は僕は基本的には心配ないと思うんですが、参加されない人たちのことだろうと思うんですね。それで、参加されていない人たちに対して僕は常にメッセージを出したいのは、まずだれでもできることというのは、例えば毎日テレビのニュースを見ると世界じゅうのことが飛び込んできますね。それを、一番大事なのは、できたら家族でたまには語り合ってみる。ニュースが終わったら次の番組に行って、だらだらだらだら3時間過ぎしちゃう。どなたでもこれは経験があることだと思うんですが、NHKには申しわけないんですが、やはりたまにはチャンネルを切って、紅茶を入れて、この問題は どう思う というような感じで語り合う、これはだれでもできるんだろうと思うんです。ちょっと努力すればいいと思うんですね。語り合うということで子供の考えを、伊達さんがおっしゃったように、親が答えを出さない。

子供の発言を聞く、質問して聞く、そうか、そうかと。だから、よい聞き手になるという努力を僕らはもっともっとやるべきだと思うんです。そうすることによってコミュニケーション力がどんどん出てきて、自分自身で考えて、感じて、行動できるような人間に徐々に、自分でも自己開発できるんだと思うんですね。

それで、どんなことがほかにできるかということになれば、そういった対話さえ、基盤さえ親子でできれば、こういったイベントに親子で参加、きょう親子で参加した方も幾人かおられると思うんですが、僕は賛成ですね。親子で参加すると、また話し合いができるわけですね。あんたどう思った。僕はこの繰り返しが一番大事だろうと思うんです。それで徐々に中級コース、上級コースというふうに発展していくわけです。

それで中級コースくらいは、こちらに県の方もいらしていますけれども、県でもメニューをつかって、市でもメニューをつかって、名古屋には日本でも三つしかない名古屋NGOセンターという、国際協力をやっている42団体が加盟しているNGOセンターもあるわけです。要するに、ここは大変機会に恵まれているわけですね。ですから、そういった機会にアプローチしていく。それで、だんだん上級コースになると齋藤さんのような人間にもなれるかもしれないし、ひよっとするとこの会場の中のお子さんから伊達さんのような国際人が育つかも说不定、そういったことだろうと思うんです。

それで、JICA自身のメニューとしては、きょうこのカタログの裏に書いてございますので、一々読み上げないで、JICAはいつでも皆さんのコンタクトをウエルカムですので、そんなところでよろしゅうございますか。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 JICAをぜひご利用ください。若干、かた苦しいところではありますが、飛び込んでいくと何でも教えてくれます。

今までの話を聞きまして、確かに我々は国際協力というのはどうしたらいいのかと。ここにいらしている皆さんは本当に関心が高いと思いますが、齋藤さんがおっしゃったフェアトレードという考え方、実はこれは生活者である女性が中心になって定着したものであります。例えばバナナなどでも、スーパーへ並んで安いものじゃなくて、向こうに自立の必要なだけのコストはお払いしましょうと、そういう形で向こうの自立支援をする。それは国内にいる立派な国際協力、海外支援ということで、これは女性が中心になって日本で定着しております。そして、ご年配の方もいらっしゃるんですが、シニアボランティアという形で、定年後、自分の生きがいとあわせて海外へ出ていくというシニアの方もたくさんいらっしゃるって、これも非常に注目されております。今、日本のいろんな世代が動き始めております。ひよっとすると若い世代が今一番戸惑いが深いのかも说不定と、そんなことも感じております。

ここまで大分皆さんにお話を伺ったんですが、さらにここからは会場の皆さんの質問をお受けしながら、皆さんにお話を伺っていきたいと思います。きょうは伊達公子さんもいらしゃって、テーマが「伊達公子と語ろう」ということですのでございますから、あのときどうだったと、一番素朴なところで結構でございます。難しそうなことは聞かなくて結構です

ので、ぜひ何か質問があれば、会場の皆さん、いかがでしょうか。

手を挙げていただけますか、会場のマイクがすぐに参ります。ここを聞いてみたいということがおありの方、どんなことでも結構です。あるいはJICAの方もいらっしゃいます。クマーラさんは名古屋NGOセンターの理事でもいらっしゃいます。あるいは、青年海外協力隊員になってみたいんだという場合には、OB会会長の齋藤さんがいらっしゃいます。

そちらに女性がいらっしゃいました。

【フロア質問者】 ネパールとか東南アジア、例えばアフリカの方で女性の自立ということに関して、日本のNGO、JICAの方々の活動ですね、そういうことをお伺いしたいなと思ったんですけども、女性の自立のために具体的にどういうことをしているか。女性の自立についてお願いします。

【パネリスト（荻原久義氏）】 簡単にお答え申し上げます。

例えば、その言葉はこちらの世界ではWIDと言って、ウーマン・イン・ディベロプメント。私は群馬県の出身でして、かかあ天下の国でして、女性が大変強い国なんですね。それで、女性が元気だと国は発展すると。これは世界的に結構認められております。それで女性が働く機会とか教育する機会にアクセスするというんですが、そういうところに接触するのが割と機会が恵まれていない。例えば、文字を読めないのは女性の方がずっと多いわけですね。学校に通っていないのも女性の方がずっと多い。ここに着目して、世界的に今ご指摘のあったように、ウーマン・イン・ディベロプメントというテーマに向かってチャレンジしています。

じゃあダイレクトには何なのかといいますと、例えばクマーラ先生がおっしゃったようないろいろ職業訓練というのがあります。ところが、こればかりではなくて、例えば水の問題があるわけですね。例えば女性は水汲みに毎日2キロ歩いて水を取りに行って、それでおけにためて生活する。水を得るのが大変な重労働だと。そこを村の真ん中にソーラーエナジーを設置して、近くにみんなが共同の水道施設をつくと。そうすると女性の時間ができるわけです。実は水を供給するというのは、女性にとって大変な問題なわけです、途上国で。そうすると女性が時間できた。そうすると今度は料理にも力が入る。栄養改善にも力が入る。時には近くのおばあちゃんとか近くの友達と歓談ができると。そして、歓談ができている間に、農作業にももっともっと時間が割けるようになる。そうすると、今度は換金作物をつくらうという意欲が出てくる。そうすると、作物ができると、今度はその作物を加工して何か民芸品をつくってみようかと、どんどんどんどんこれが発展していくわけです。それが国づくりに大変なパワーになる。そうすると、子供たちがお母さんがわずかに稼いだお金で学校に通えるようになる。そういう影響がありまして、そういったいろんな段階に対してJICAはウーマン・イン・ディベロプメントという言葉の中でいろんなメニューをそろえて、その国、土地柄に合った協力をやろうということで、今、盛んに世界じゅうでやっております。そんなところでよろしゅうございますか。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 いかがですか。

この会場もきょうは女性の方の参加者が多いということですが、齋藤さん、協力隊員も女性の方が多いんですよ。

【パネリスト（齋藤弘之氏）】 そうですね、最近、女性が大変多くなりました。例えば女性にしかできない職業、例えばイスラム教の国ですと男性と女性が分かれてしまいますので、女性に何かアプローチしようと思ったら女性でないとできないという面もあり、日本は最近女性が元気ということもあるでしょうが、女性が大変多くなりました。協力隊の当初であれば、男性がほとんどで女性は本当にわずかだったようですが、最近では女性が多くなったというのは協力隊30年の歴史では大きな変化だと思います。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 伊達さん、バングラディッシュでも女性の隊員の皆さんは大変生き生きとやっておりましたですね。

【パネリスト（伊達公子氏）】 そうでしたね、生き生きとしていますね。

今おっしゃったように、女性でしかできないことというのは、今回見たのも婦人科の病院だったということもあって、女性の方が本当に生き生きとして、女性が院長とでも…。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 やり合っていましたね。

【パネリスト（伊達公子氏）】 そうですね。立場的にも堂々と意見を言ってやっていらっしゃる姿というのをもたくさん見ましたし、そしてバングラディッシュの国自体も女性の考え方、あり方というものも随分変わってきているんだなというのも、バングラディッシュの国ではすごく感じましたね。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 ほかに質問。

こちらの若い男性の方です。今マイクが参ります、ちょっとお待ちください。

【フロア質問者】 伊達さんにちょっと質問したいんですけども、高校を出て海外の方でプロテニスプレーヤーを目指すということで挑戦されたんですけども、私も今、会社員で日本で働いているんですけども、今まで大学とか通ってしまして学んだこととはまた違う道で挑戦しようかなと模索中なんですけれども、今でこそ世界の伊達と呼ばれていますけれども、高校を出られてすぐに外国に出てテニスプレーヤーを目指して、正直、その道で成功するかどうかというのもすごい不安だったと思いますし、世界ランキングが上がるまでにもいろんな苦痛とか、不安とか、悩みとかあったと思うんですけども、そういうときに支えになったとか、ストレス解消というんですかね、うまくいかなかったときにどういう心がけをしたとか、どういう考え方をして前向きになれたか、国際関係のこととちょっと違うかもしれないんですけど、そういう話を聞かせてください。

【パネリスト（伊達公子氏）】 私の場合は高校を卒業してプロの道に入ったんですけども、まずプロの道というものを目指す、プロになりたいというふうに決心をしたときには、やはり両親の立場からすると、もし成功しなかったらというか、その世界で活躍できなかったら、同じような土俵に立てなかったらどうするんだとか、けがをしたらどうする

んだとかという不安は親心として私の方にアドバイスをしてくれたんですけれども、常に私はどちらかという直観派で、自分がこうと思ったらそれに突き進むタイプなので、先ほど荻原さんもおっしゃっていましたが、自分で見て感じた、これは今ちょっとお話を聞いただけで言うのも難しいことだとは思いますが、何か自分が新しいことに進みたい、こうありたい、何か違うことにチャレンジしてみたいと思うことに気づいたことというのはすごく大事なことなんじゃないかなと思うんですね。私の考え方とすると、それを感じたのであれば、そこからどう道を切り開いていくかというのはこれからのステップだとは思いますが、まずそこに気づいて、そこで自分で考えて、それでも同じ場所で、同じ環境の中でも違う考え方はできると思うんですね。なので、それが違う環境に身を置くのか、同じ場所で違う考え方でやるかというのは人それぞれだと思うんですが、私もそうやって自分の道を選択してきたつもりだし、自分で選んだ道だからこそ責任を持って、それはだれのためでもなくて自分自身への責任を持って自分で選んだ道を突き進む。

そして、もう一つは失敗を恐れないことですかね。私は実際、もちろん負けて悩んだこともあるし、けがもしたし、でも勝ったときだけが充実感を得られただけではなかったの、負けて学んだこともたくさんあったし、負けたからこそ、それがまたやる気につながったこともあったし、失敗をして得られたことの大きさというのもすごく多かったので、失敗を恐れないということですかね。

あとは自分が、結果のためにやるとどうしても焦りも出たりしちゃうと思うんですが、自分がやっていることの過程を大事にしてやっていくということを私は常に、でもその中でも人間なので、もちろん思い悩んだり不安に思ったりすることはたびたびどうしてもあるんですが、でもその中でやっぱり自分で決めたことだということが私にとっては支えになってやり遂げられたことかなと思います。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 いいですね、伊達さんから直接答えをいただくなんて、励みになったと思います。

本当にそうですね、失敗を恐れないって。私も団塊の世代なんで、一番寂しいのは、なかなか人生がやり直しがきかなくなったというのは寂しいですね。うちの奥さんだけはやり直しがきくかもしれないと思っているらしいんですが、それはともかくとして、あともう1問だけ皆さんから質問をお受けしたいと思います。もうお1方いらっしゃいますか。

はい、どうぞ。

【フロア質問者】 今、世界の関心事といいますとアメリカのイラク攻撃だと思うんですが、そんな中で国際協力はどんなことができるのか、ちょっとご意見というか、考えをお聞かせ願いたいんですけど。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 あんまり大きな話じゃなく、身近なところで今のお話を、荻原さん、お願いします。

【パネリスト（荻原久義氏）】 直接的ではないと思うんですが、時代が物すごく今変化しているというのを僕はすごく感じますね。簡単に申し上げますと、89年にベルリンの壁が崩壊して、91年にソ連が崩壊して、それ以来10年間、世界は新しい秩序といたしますか、バランスがどこにあるのかということを探めてやってきました。それで今日があるわけです。政治の一面はそういうことなんですけれども、その裏にあるのが、世界をどうも国とか県とかそういう線じゃなくて、違った力が突き動かしてきているなというのが私の実感です。

具体例は、地雷の問題でジョディ・ウィリアムスが90年代に動いてノーベル平和賞をもらったのはご存じだと思うんです。そして最近エイズ問題ですね。エイズで世界のメーカーが抗レトロウイルス剤というのを発明して、先進国では1万数千ドル払わないと薬が使えないんですが、それをインドのメーカーが350ドルで、その薬を飲めばエイズが発症しないんですよ。そういうことを実はもうやっちゃっているんです。それを動かしているのも市民社会なんですね、NGOなんです。それで今のイラク、昨日も世界中でデモがありましたよね。2月15日も世界中でデモがあったんです。国際協力とイラク問題ということになるとなかなか難しい問題なんです、どうもいろいろ世の中が違ったところで物すごいパワーで、それにインターネットもあって、世の中がどんどん今動いているなというのを実感するんです。

それで、JICAがイラク問題をどうするかというと、今は何もやることができないんですが、皆さんは、実はアンテナをそういうふうに張って、世の中が今どうなっていくのか、これからどういうふうになっていくのか、どうあるべきなのかを自ら考え、まとめておくこと。また、子供たちともよく話し合っ、新しい時代がもう始まっているんだからこれからは自分の考えをしっかりと持っていこうというのが僕からのメッセージです。当然ながら、JICAは平和構築とか、紛争予防とか、いろんなメニューをつくって、アフガンとか東ティモールとか、これからもどんどん仕事が増えていくわけです。紛争後の協力、これはJICAの大きなテーマです。ただ、この会場では僕はそれだけを申し上げておきたいと思います。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 はい、ありがとうございました。

これはまさにおっしゃったように、市民の力ですから、つまり一括して一律して答えがこうだというふうにくることができない。一人ひとりがどう考えるかということが問われているんじゃないかという気がします。

時間が過ぎてしまいました。最後に伊達さん、今回の「伊達公子と語ろう」、感想をひとつお願いします。

【パネリスト（伊達公子氏）】 こういう機会を持てて皆さんとお話できたので、きょう参加していただいた方の中には、もちろん先ほどおっしゃったように親子で参加していただいている方や学生の方たちもいらっちゃって、いろんな方々がいらしていただいたんですけれども、実体験というのは、私自身もそうなんですけれども、何かを文章にした

り、何かを話したり、何かを感じるときというのは、実体験することが一番何よりも感情も入ることだし、自分の素の気持ちというのが出てくると思うので、そういうものを大切にさせていただきたいなと思います。

そして、協力隊員の人たちと私は現地に行って接することが一番いろんなことが、やはり隊員の人たちが現地の生活に溶け込んでいっちゃうので、そういう人たちの情報というのは意味が大きいなというのをすごく感じるんですけども、その中で、もしご両親の中で娘さんや息子さんたちが隊員として途上国に行くとちょっと心配だなと思われる方も実際のところあるかもしれないんですけども、でも人間って、私もそうなんですけれども、どんなところに行っても2日、3日するとなれて、別にコンピューターがなくても、携帯がなくても、日本にいと携帯を忘れたと思うと、ああ、きょう1日どうしようと思うんですけども、でもそういうのがなくても人間として全然平気で生きていけるというのは、二、三日もすればけろっと忘れて生活に溶け込んでいけるし、そういう実体験が一番人間として大切なんだなというのがもしきょう感じていただいて、また皆さんが、今後、娘さん、息子さんじゃなくて、自分自身としても何かを身近なところから、私も国際協力とはとって難しいことを考えてキッズテニスに行っているわけでもないし、この場所に来たわけでもないし、やはりスポーツを通じて自分ができることを自分の素直な感じのままにやっていくことが一番大事なことだと思ってきょうも来ていますので、皆さんもそのように感じて帰っていただければいいなと思っています。

【コーディネーター（町永俊雄氏）】 ありがとうございます。本当に今のお話にすべてが集約されています。

伊達さんはもう皆さんおわかりだと思うんですけども、身近にずうっと接していますと、世界の伊達、アジアの伊達ではあるんですけど、本当に気取りのない普通の女性であります。おっしゃったように、実体験から自分が何ができるかというところをつなぎとめていくという、ですから皆さんも恐らくそうでしょう、国際協力とはというふうに考えないで、自分が自分らしく生きるためにはというところから考えていくのが多分正解ではないかと思います。

きょうはどうも長時間ありがとうございました。皆さん、ありがとうございました。
(拍手)

【荻原久義氏】 どうも本日はありがとうございました。これをもって講演会を終了させていただきます。

なお、アンケートの方をご協力いただければと思います。受付の方で提出していただくようお願いします。

本日はどうもありがとうございました。